

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京都市立上京中学校 】

1 実践テーマ	①・Ⅱ・③・Ⅳ・⑤（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	第3学年（134名）
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動<small>次の5つの中から選択しOをつけてください【複数選択可】</small></p> <p>① 教科名 ()</p> <p>② 行事名 ()</p> <p>③ その他 (総合的な学習の時間)</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名 ()</p> <p>② その他 ()</p>
4 目標 (ねらい)	対象学年が1年生時にパラスポーツを体験、選手の生の声を聞き、困難に立ち向かう強い心をもつ大切さを知り、自分たちが出来ることを発信してきた。本校出身の車いすバスケットボールの選手へのねぎらいを込めて、巨大パネルに表現をする。
5 取組内容	<p>○テーマ： 『挑戦』</p> <p>オリンピック・パラリンピックの取り組み3年目完結編!!</p> <p>○発表内容</p> <p>展示 一つの作品で2つの内容が織り込まれた作品の制作をする。</p> <p>① オリンピック・パラリンピックのワンシーンをデジタルアートで表現する。全員で1作品を完成させる</p> <p>② 「挑戦」をテーマに自分たち自身のこれからの応援する、奮い立たせることば、文字を一つ実行委員で制作する</p> <p>制作方法 デジタルアート…指定された箇所にペンで色付けを行う。</p> <p>展示場所 昇降口壁面（大壁画「挑戦」の下部分）1点 （小パネル）4点</p>





テーマ題字は昨年度に美術部でデザインした。2 作品が角度を変えて見える作品になっている。1 つはパラリンピック代表選手である卒業生の画像、もう一つは学年で自分たちを応援する漢字を募集し、「華」という文字をデザイン化したものを、学年実行委員でパネルに制作した。巨大パネルの左右の小パネルの作品はオリンピック・パラリンピック関連の競技具をモチーフにしたものやシーンをデザインしたものになっている。(縦約 3.5m×横 4.5m の巨大壁画に仕立てた)

6 主な成果

これまでに 2020 年のオリンピックイヤーに向けて、1 年次・2 年次と取り組みを行ってきた。1 年生の 2019 年度は、自分たちでできる努力の形を考えるとともに、本校の卒業生である車いすバスケットボールの選手の話聞き、体験し困難に立ち向かう強い心をもつ大切さを感じる授業を行った。総合的な学習の時間では人権学習で学んだことを取り入れ、オリンピック・パラリンピックに向けて様々な競技のこと(特にパラリンピックに重点をおき)を知り、様々な角度から調査を行った成果を文化祭で発表した。

2 年生の 2020 年度は、代表選手から、追及することの素晴らしさを感じ、日本でされるオリンピック・パラリンピックの選手たちを上京中学校から応援していこうとすることで意識の高まりが出てきた。

本年度、3 年生では、オリンピックやパラリンピックを観戦、応援し、パラリンピックの車いすバスケットボールで活躍をした卒業生の頑張りを称え、巨大パネルに表現した。オリンピックやパラリンピックで世界各国のアスリートが一同に集まり競技をする意義を考え、これからの自分たちにできることを振り返り考えることが出来た。

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>これまでと同様に、本校の生徒・教職員のみならず多くの人が入り出す昇降口に巨大壁画として展示し常に目にできるようにし、自分たちもそれぞれが共に心を揺さぶられるような表現をした。文化祭は実施されなかったが、これまでの取り組みの集大成として3年間の共通テーマが分かる展示発表とした。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>今年度は昨年度と同様新型コロナ禍でポスターセッションや対面の発表ができなかった。交流のとり方をどの用意すると効果的かなど。今後も様々な状況を考えて、ICTを活用した発信や交流を取り入れていくことで新たな活動方法を工夫する必要があると考える。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>最上級生として、今年度は集大成の発表とした取り組み・制作を考えた。次年度は「項目8」同様、様々な状況を考えて、ICTを活用した発信や交流を取り入れていくことで新たな活動方法を工夫する必要があると考える。</p>